へ 13
3755
8

十五編上
柳下和林合梓

門へ13
3755
巻 8

山雅譚

十五編
種員作
國貞画

柳下堂
松林堂
合蔵客

唐土の小説に聽下回文解皇朝の戯作に後巻を讀えて知玉ふべしとは和漢一對末文の定式扨軍書讀ぎ鬪戰半話に後談は明日の前席と説止咄々家の續噺も聽衆が耳を傾頃後話は明夜の後座と咄終各的殘話を乞ひ[illegible]やうに設が今世の流行已も猕猴が人真似に筆頭揮出不知火の十一編まで此巻まで説つけたる長物語四冊ぐ素的成譚を種々にしてと一個々々救といふが作意の的まで一回全説終ど當春既に御披露はぐく兒弓も嘗えぬ頑才あがら走筆の達作に敷ひ廿編まで通矢の差誥引誥早春かぎり出版いたせば只管的當の高評を希奉るなり

嘉永癸丑晩秋結稿

同　甲寅開春發版

柳下亭種員記

一度筑後國高良山の
大天狗霧太郎と
偽名をなして
鳥山秋作
輝忠
敵を計
る為に

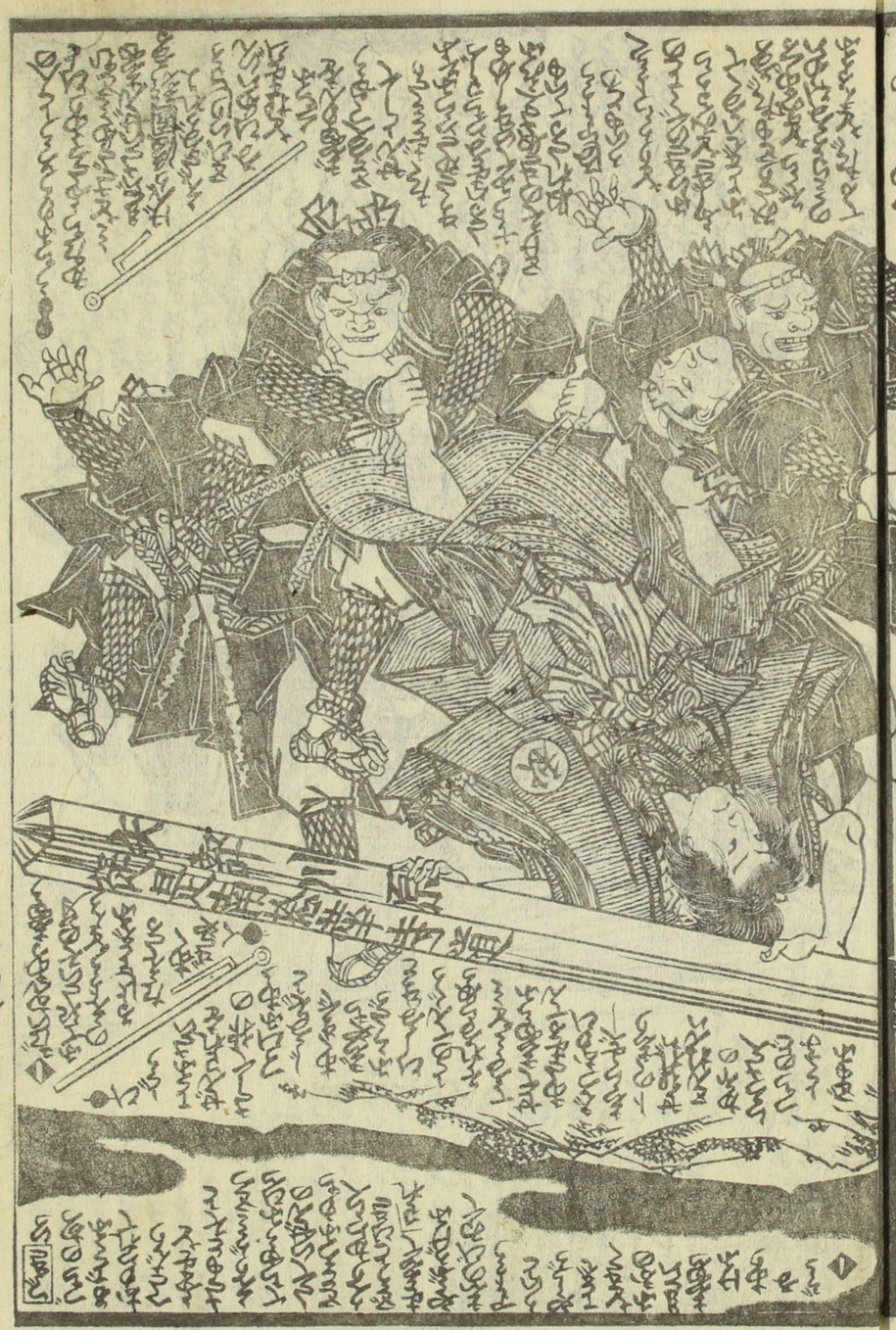
十にんろうづき

(六)

(七)

此画の下の方へ三丁つづく

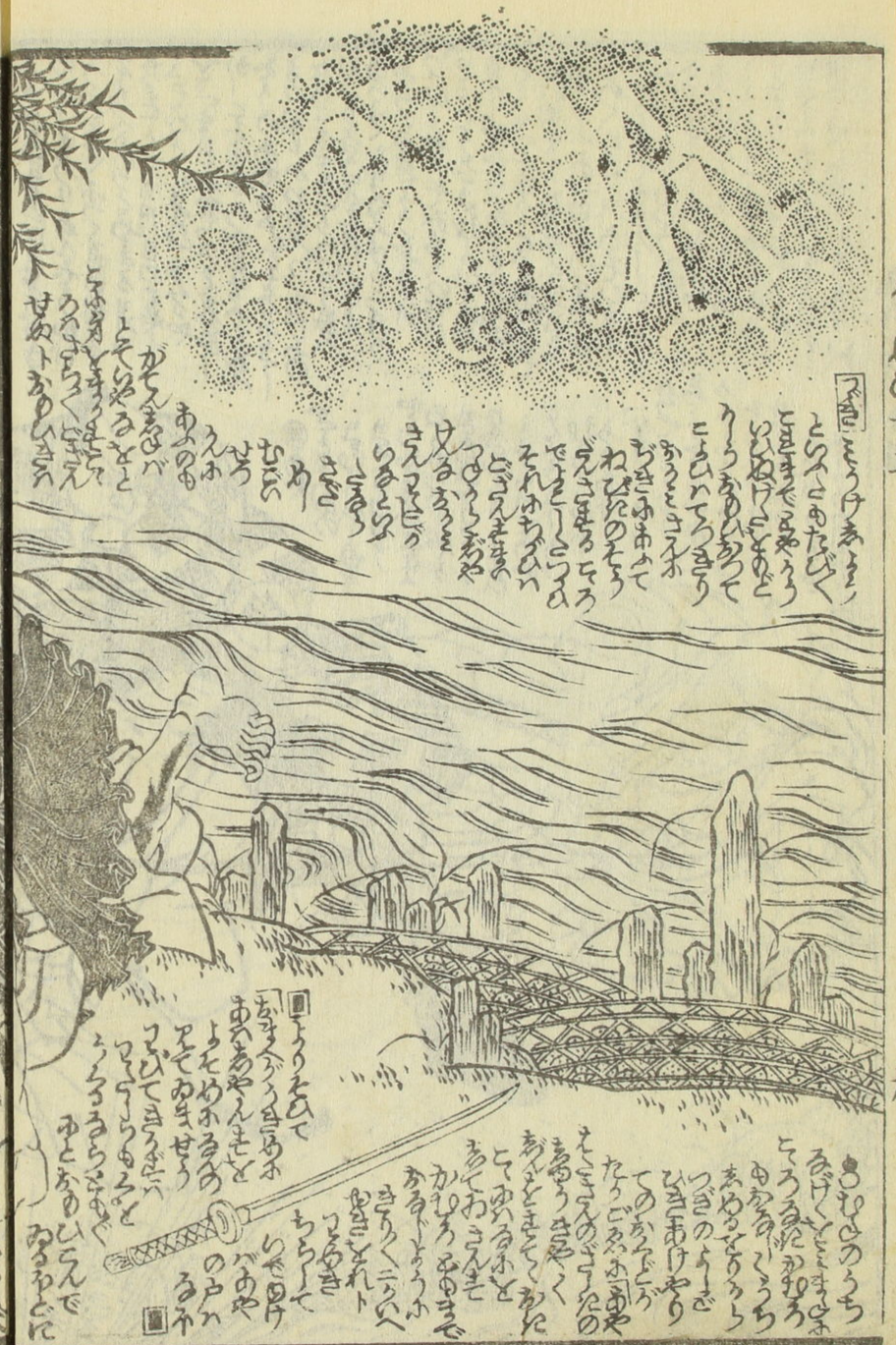
秋



頓
了
六

七

頓念七郎と水中へ蹴込



嘉永弟七稔甲寅歳新著標目録

不知火物語

第十五編より廿編迄當寅歳正月無相違出板

柳下亭種員作
楳蝶樓國貞画

此等戯作の事は見物様方の[illegible]
仕合右[illegible]當年より[illegible]
[illegible]
廿編[illegible]迄[illegible]出板[illegible]廿一編より以後も時候[illegible]
[illegible]

板元 鐵白

禁方 玉壺生肌膏 一貝 三十六孔

金瘡速愈 奇功氏 一枚 廿四孔

[illegible]

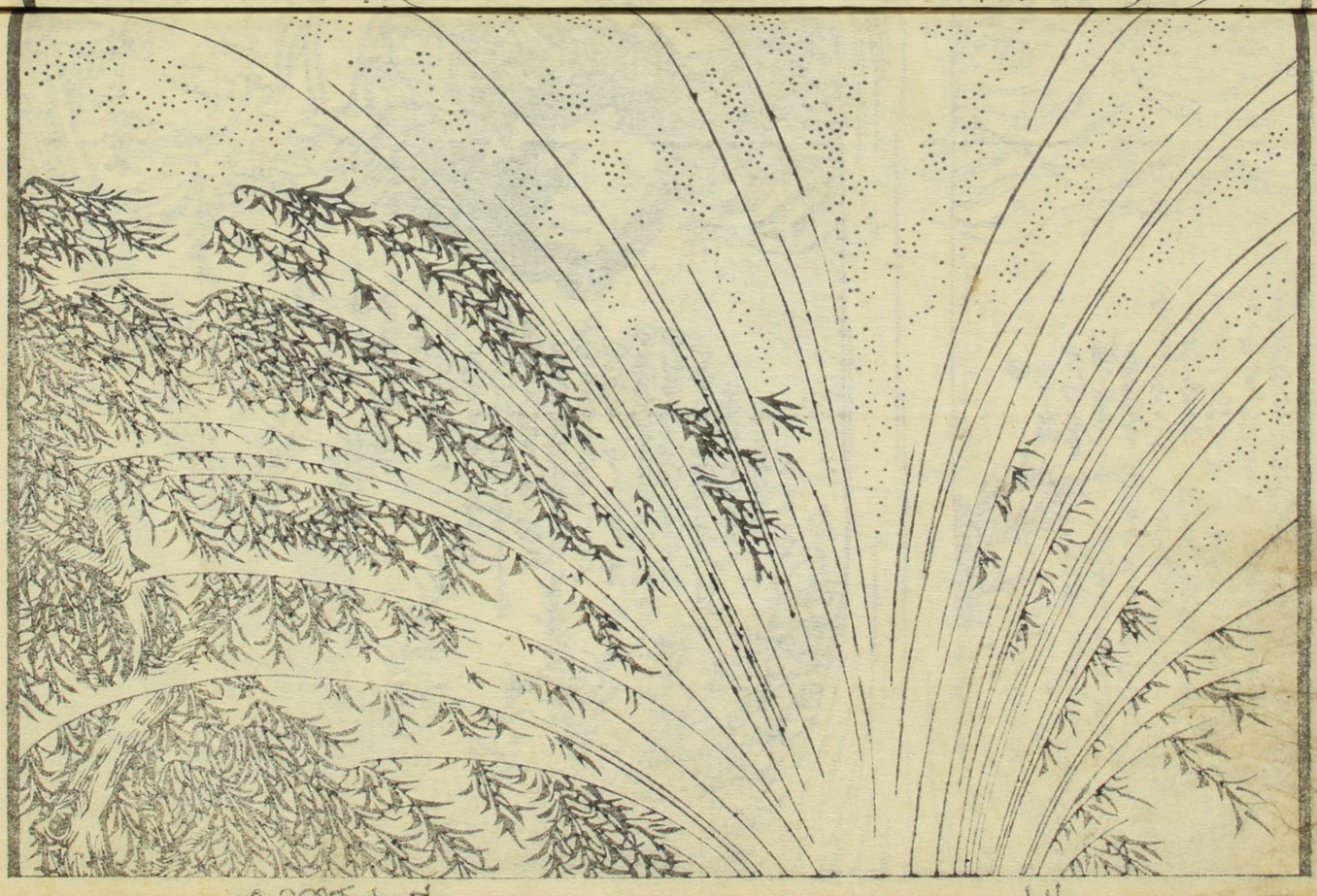
製藥所 新吉原 玉柳下 樓亭
取次所 真乳山東石坂下 大傳馬町二丁目 三河屋喜兵衛
同

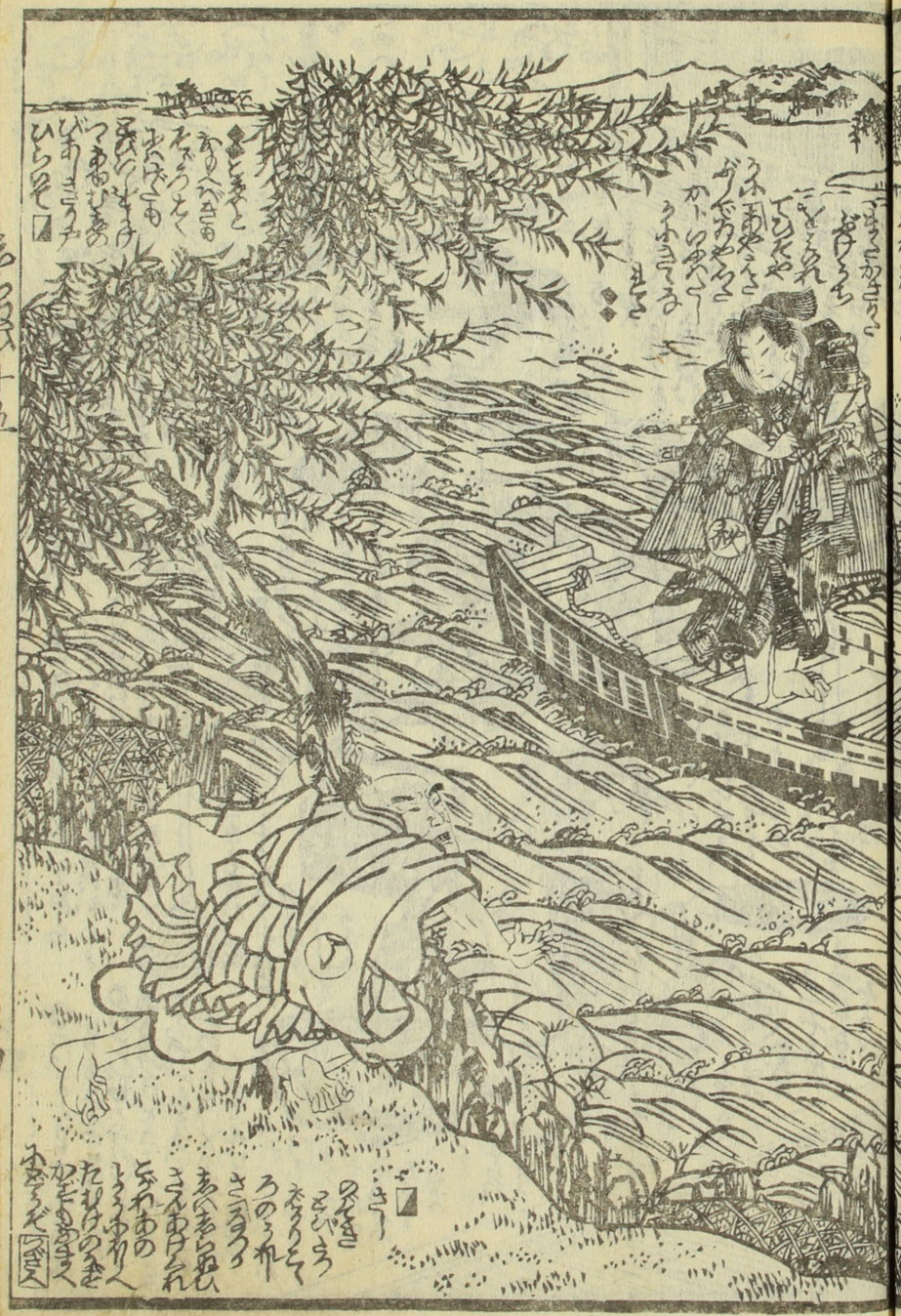
地本東錦繪類問屋
通油街 藤岡屋慶治郎
真土山東石坂下 柳下亭 合梓

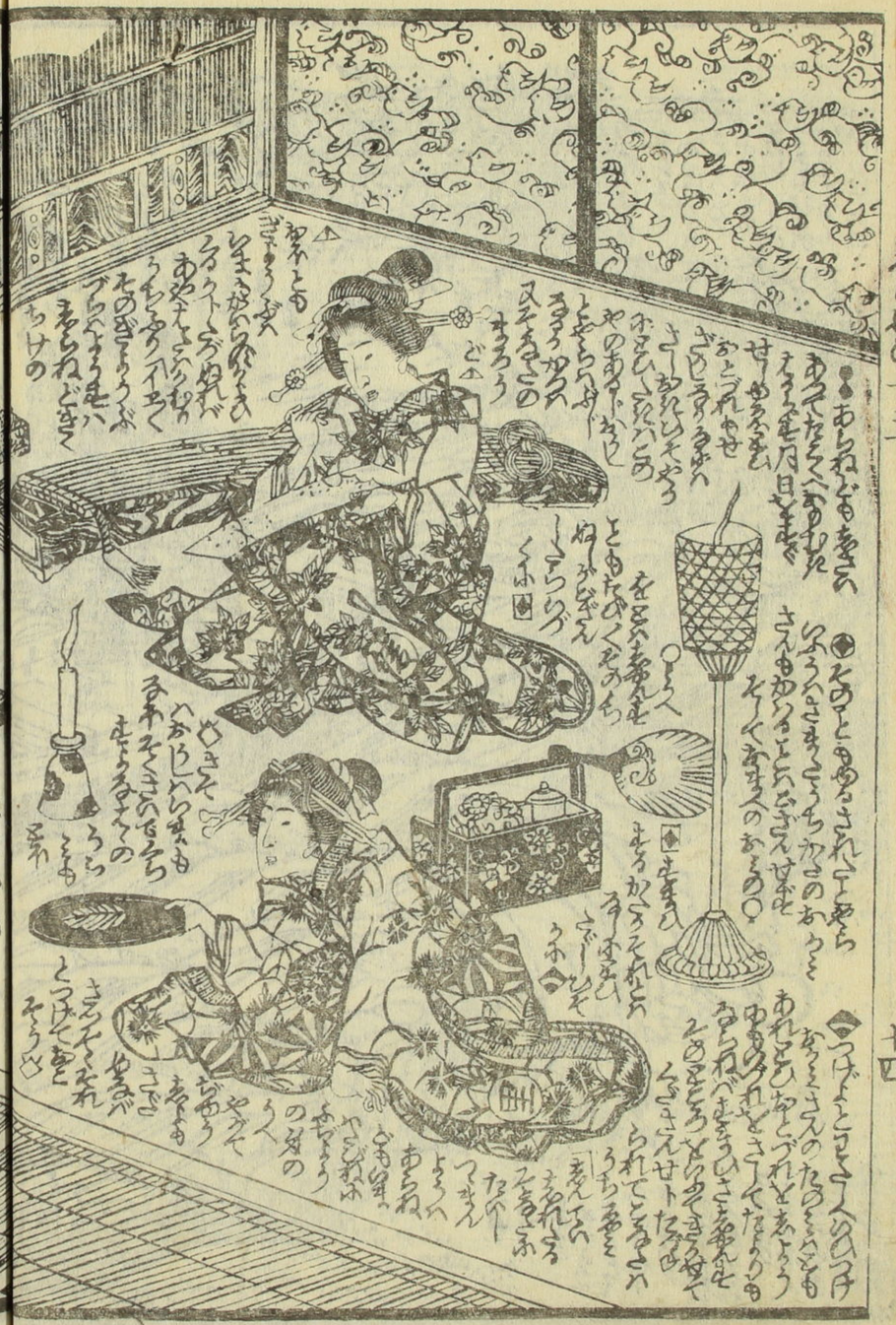
牧語

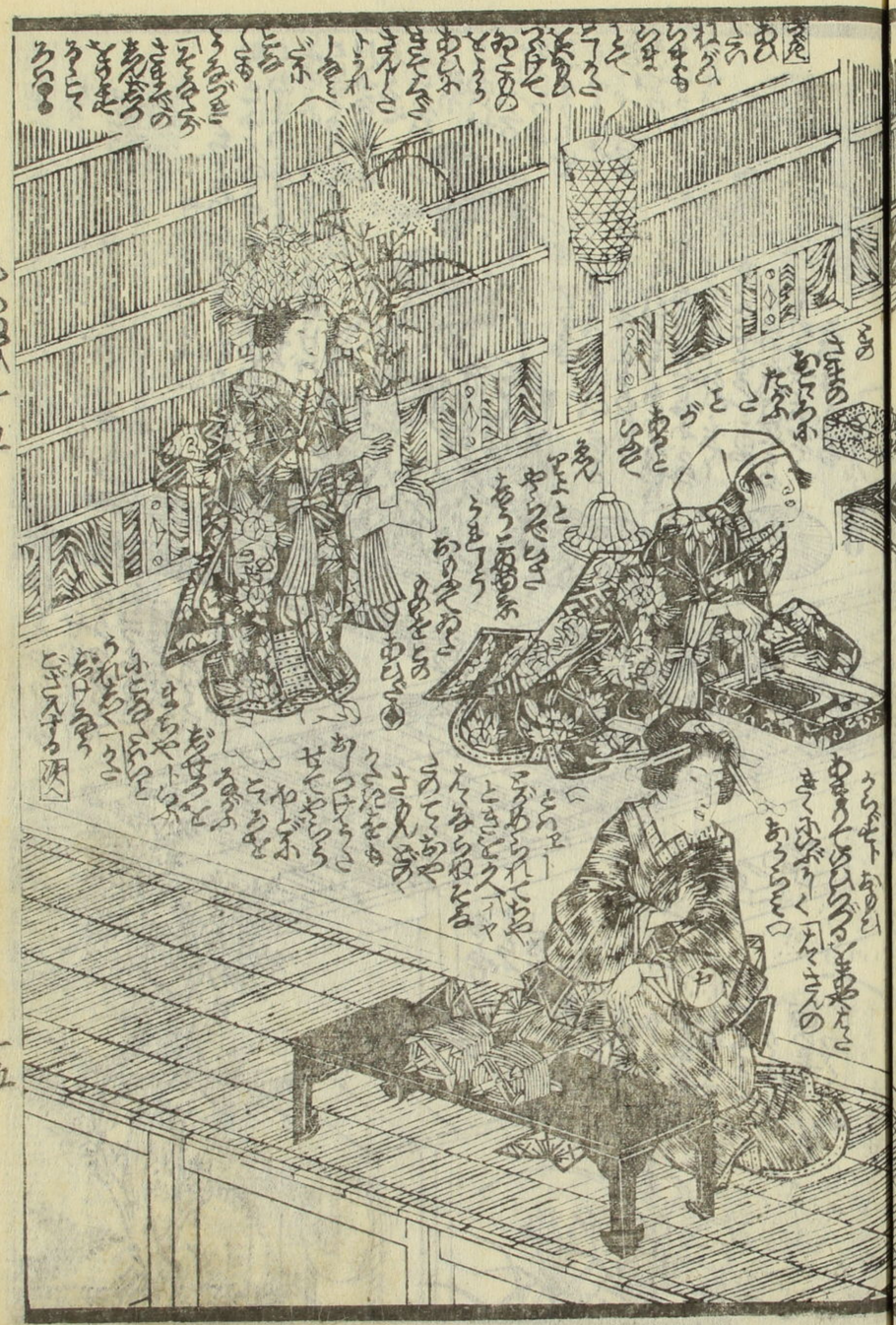
種員作
國貞画

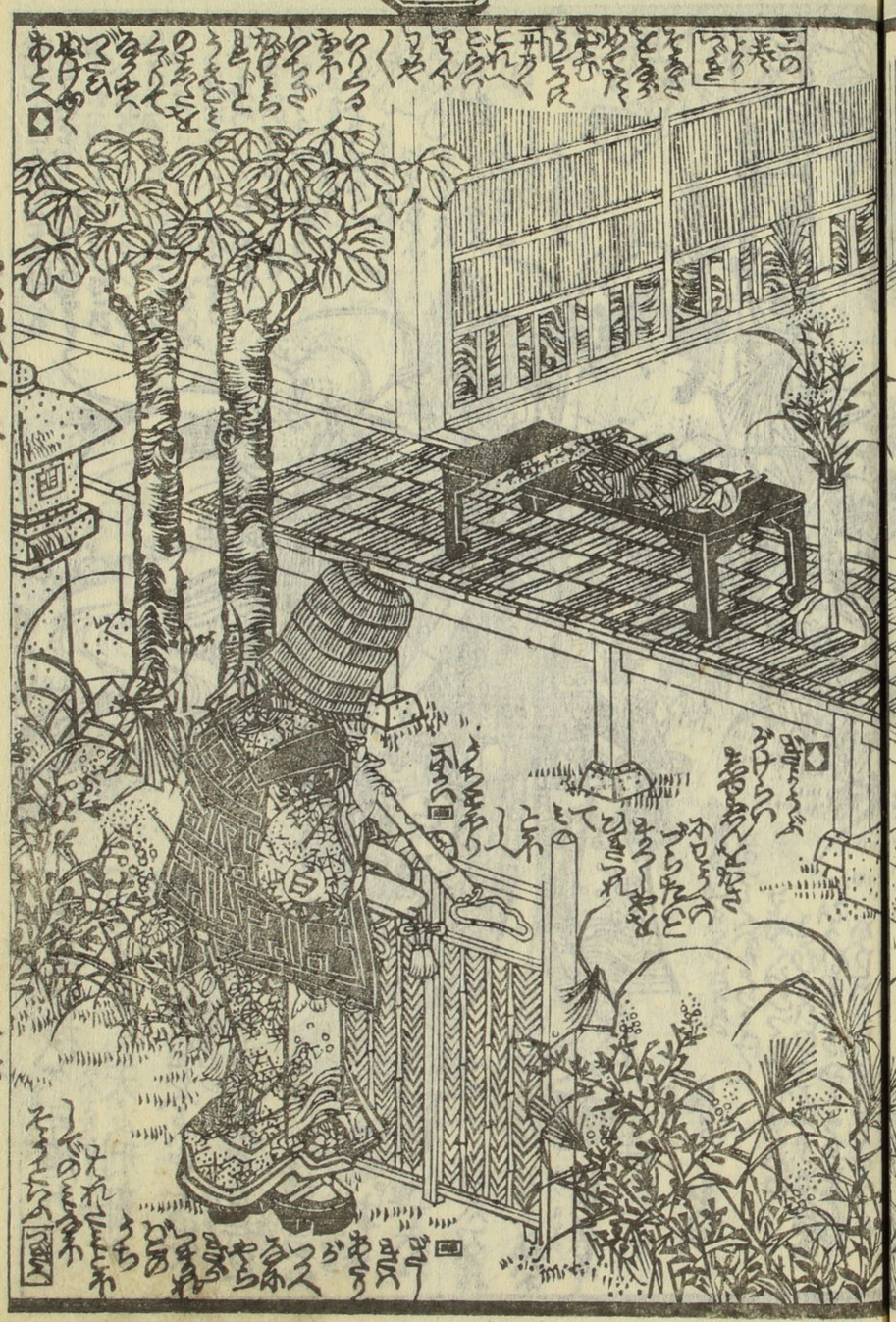
十五編下

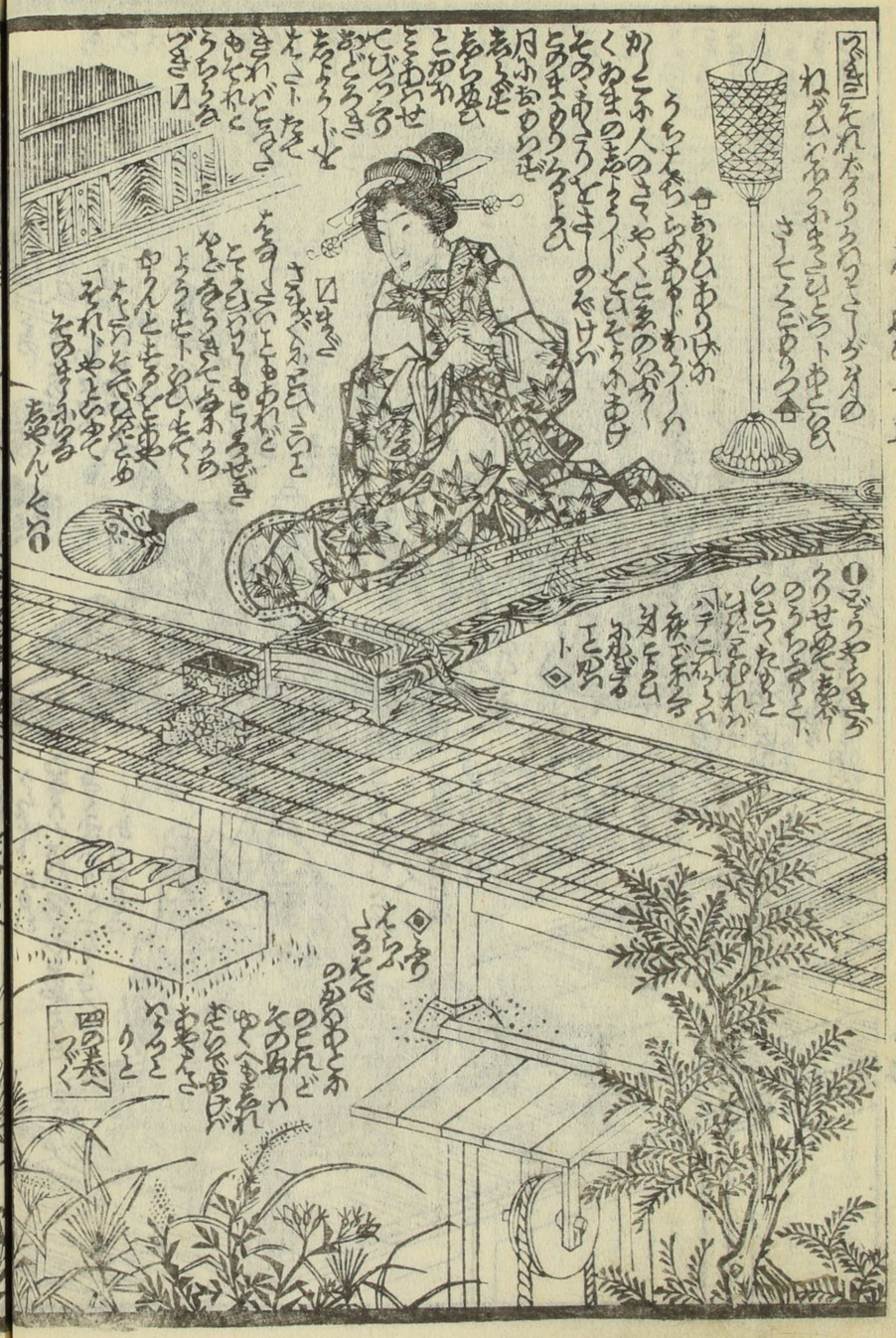


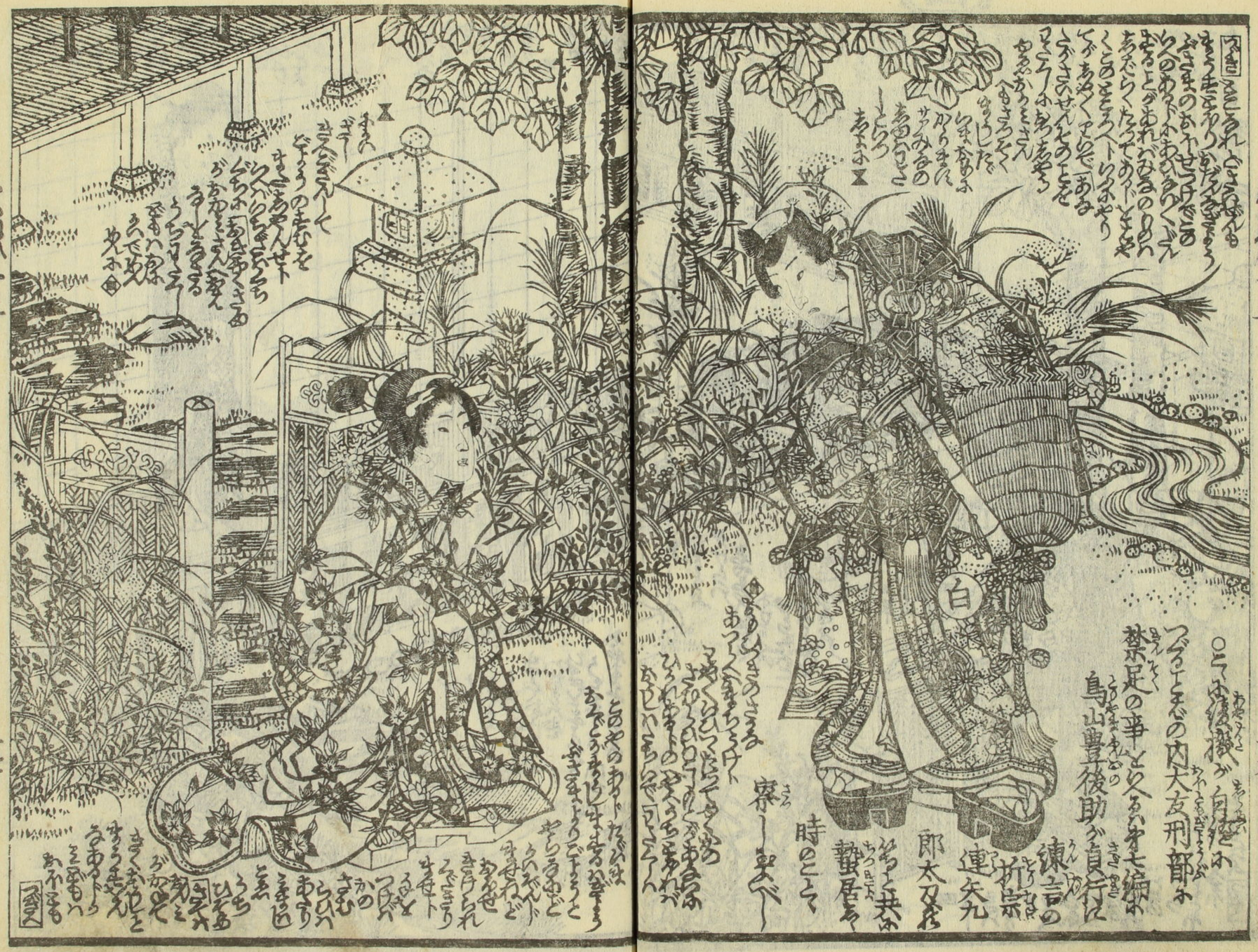


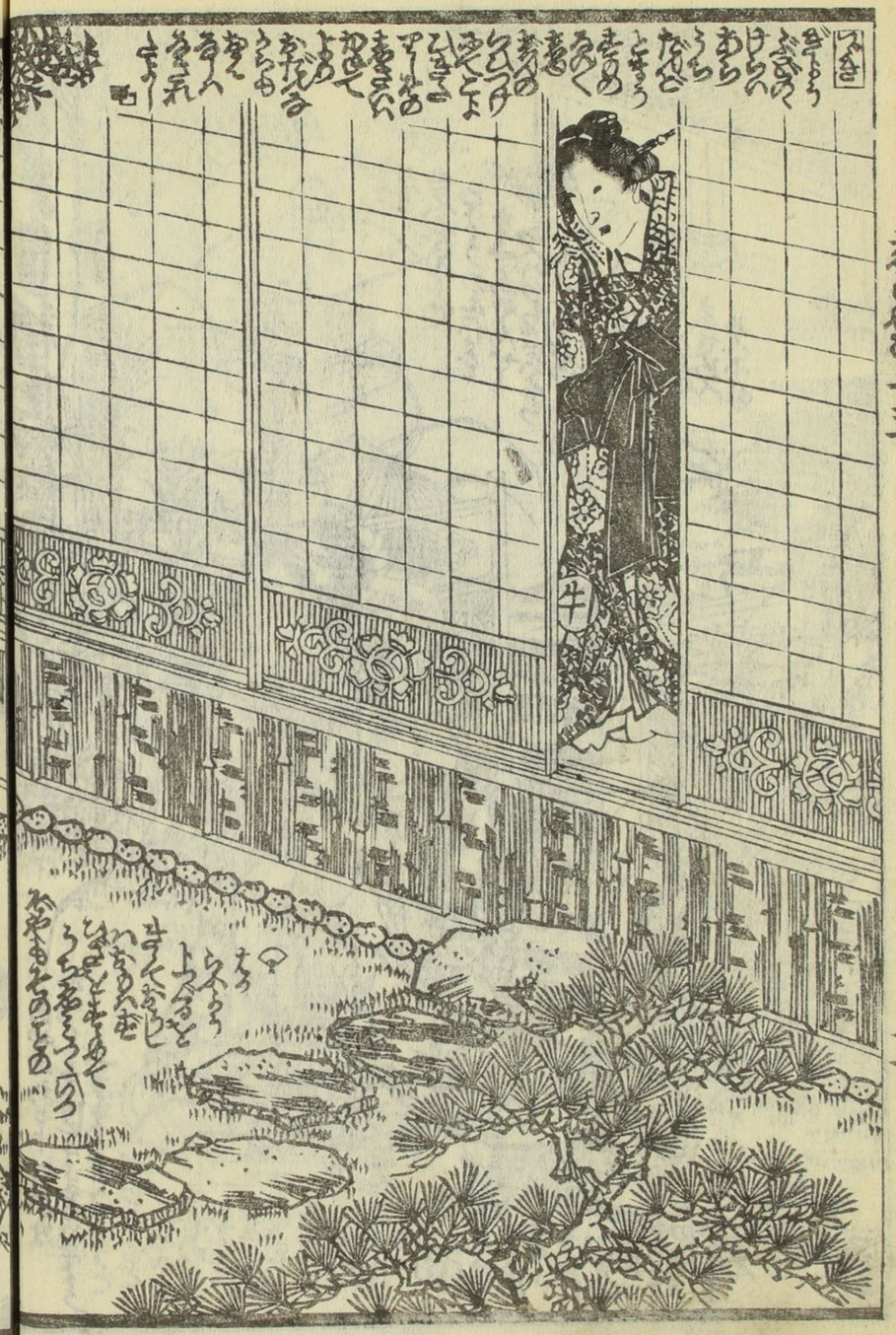


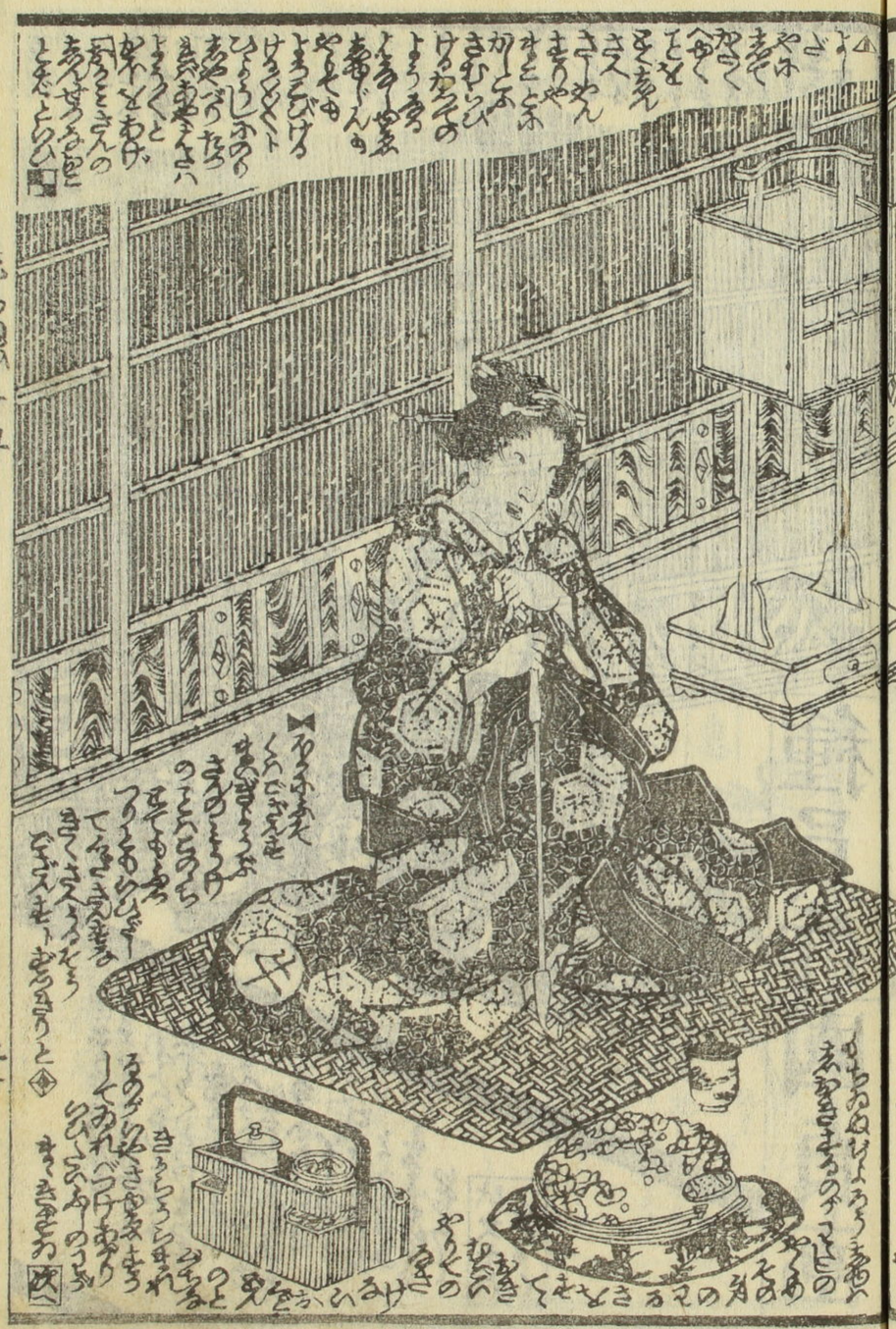







白





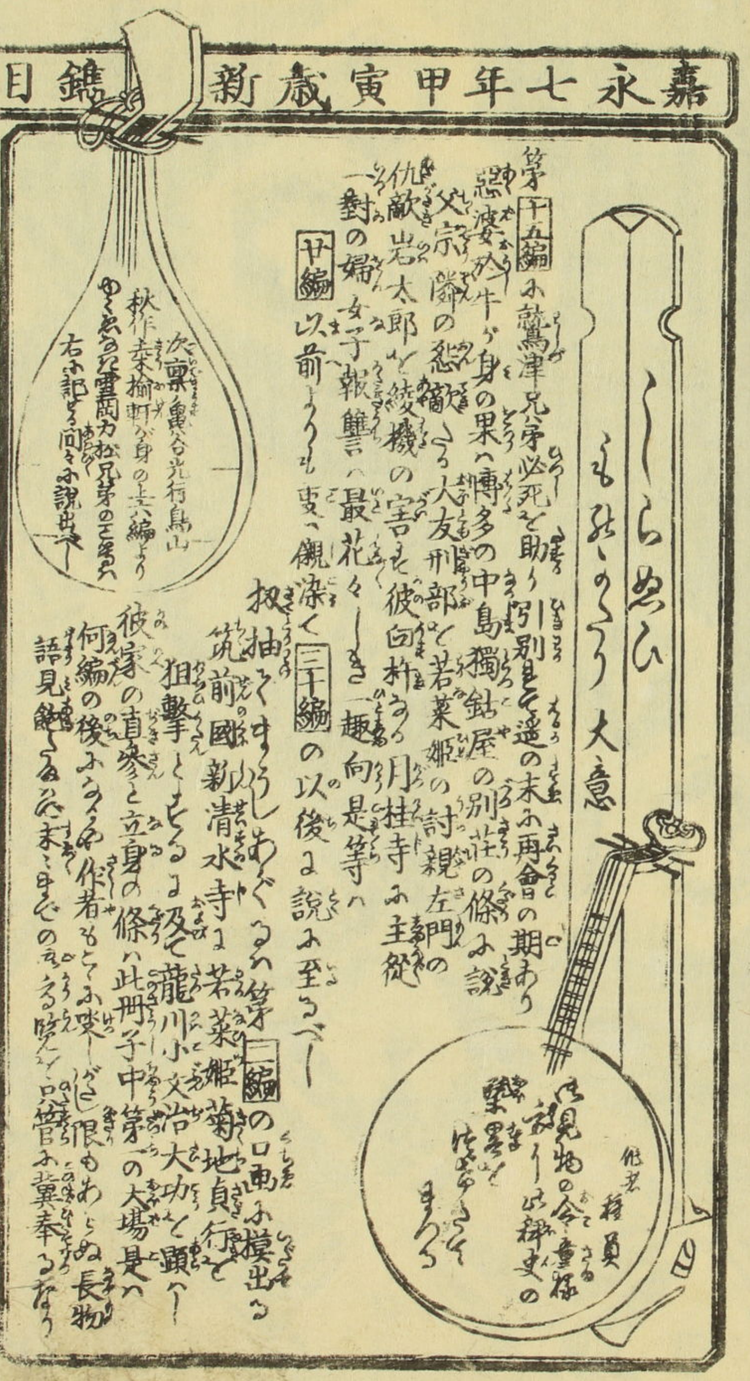
種員作國貞画

嘉永七年甲寅歳新鐫目録

地本東錦画類問屋

通油町 真土山東石坂下

藤岡屋慶次郎 柳下亭合梓


くしらぬひ
もみのうち 大意

第十五編に鷲津兄弟必死を助け別して遥の末に再會の期あり
惡婆於牛が身の果ハ博多の中島獨鈷屋の別荘の條に説
父宗隣の怨敵なる大友刑部と若菜姫の討親左門の
仇敵岩太郎と綾機の害も彼向杵なる月桂寺に主從
一對の婦女子報讐ハ最花々しき一趣向是等ハ
廿編以前よりも更に觀染く三十編の以後に説に至るべし
扨抽くまうしあぐるハ第二編の口画に模出る
筑前國新清水寺に若菜姫菊地貞行を
狙撃とまるに及て龍川小文治大功を顕ハし
彼家の直參と立身の條ハ此冊子中第一の大場是ハ
何編の後にあるべし作者もとに笑しげに限もあらぬ長物
語見飽しなるべし末々までの立る筑を只管に冀奉るなり

次稟魚谷光行鳥山
秋作桑榆軒が身の上六編より
ゆくゑの雪岡力松兄弟の上第八
右に記せる間々に説出せし

十六編上
外題豊国画

白縫衆

嘉永七甲寅歲正月

種員 柳下亭

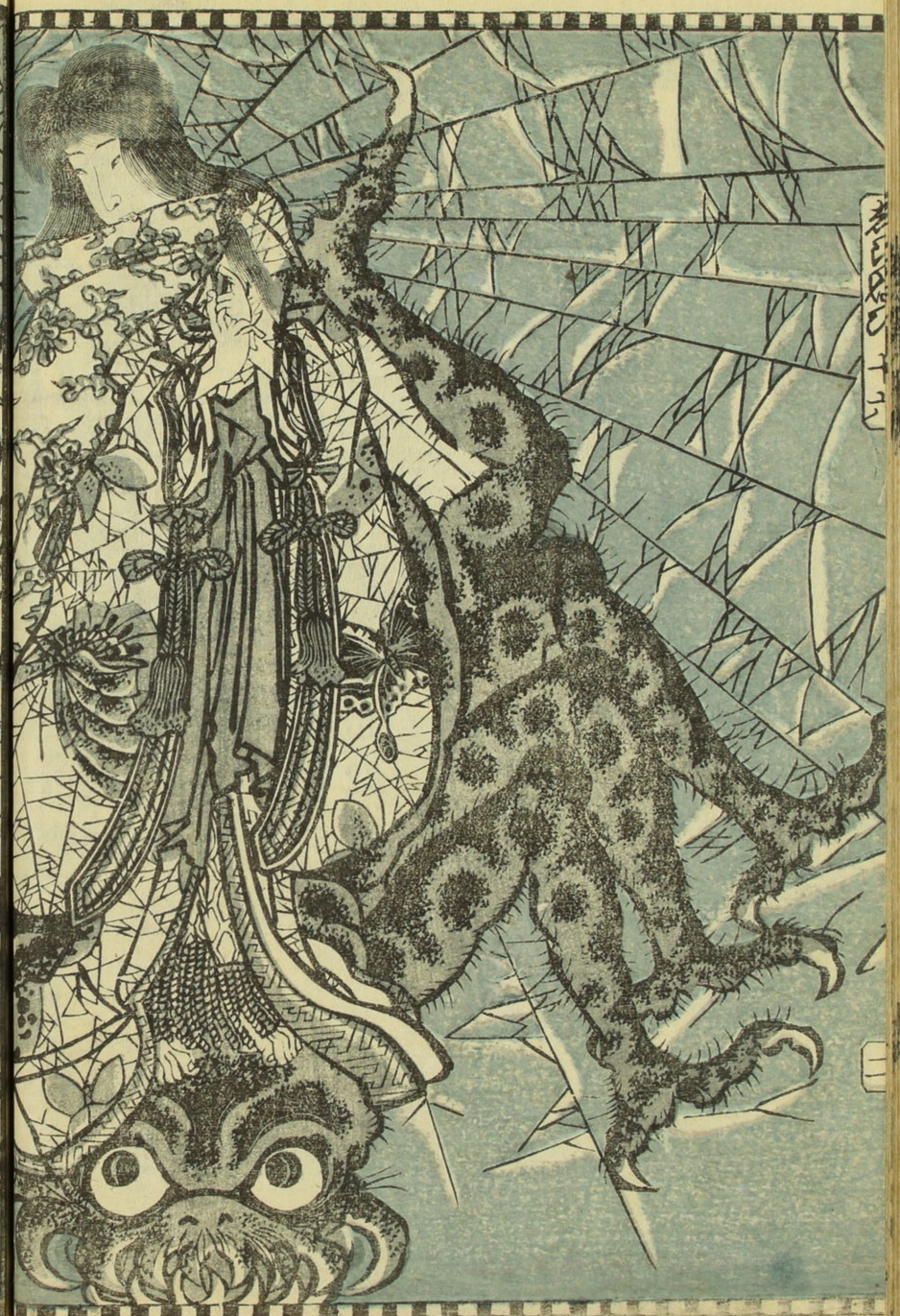
草菴に傖父わりて足下が著述る白縫物語は
何的書に本據にやと問予答ゝ曰明人逸田叟が
女仙外史に見たる唐月君の所業を以て我 皇朝の叟に
模擬し大友氏の孃子若菜姫といふ名は表せども
實は是無有の人物然も果敢なき小說野乘筆頭に
虛談を注ぐし瀉彼不知火の明光はひきうへ僕
九州を經歷せざれば地理も境界も無案内の黒夜を歩行る
心地して覺束なくも稿をしなりと賓客に應たる詞を
白地此編の舒に換ゝ記せり

嘉永甲寅泰月

柳下亭種員

四神之内後玄武ふ擬
菊地家四大勇士の一個
亀谷多門之助光行

四神之内右白虎ふ擬
菊地家四大勇士の一個
帛石八郎　武門



大友宗麟の息女
若菜姫

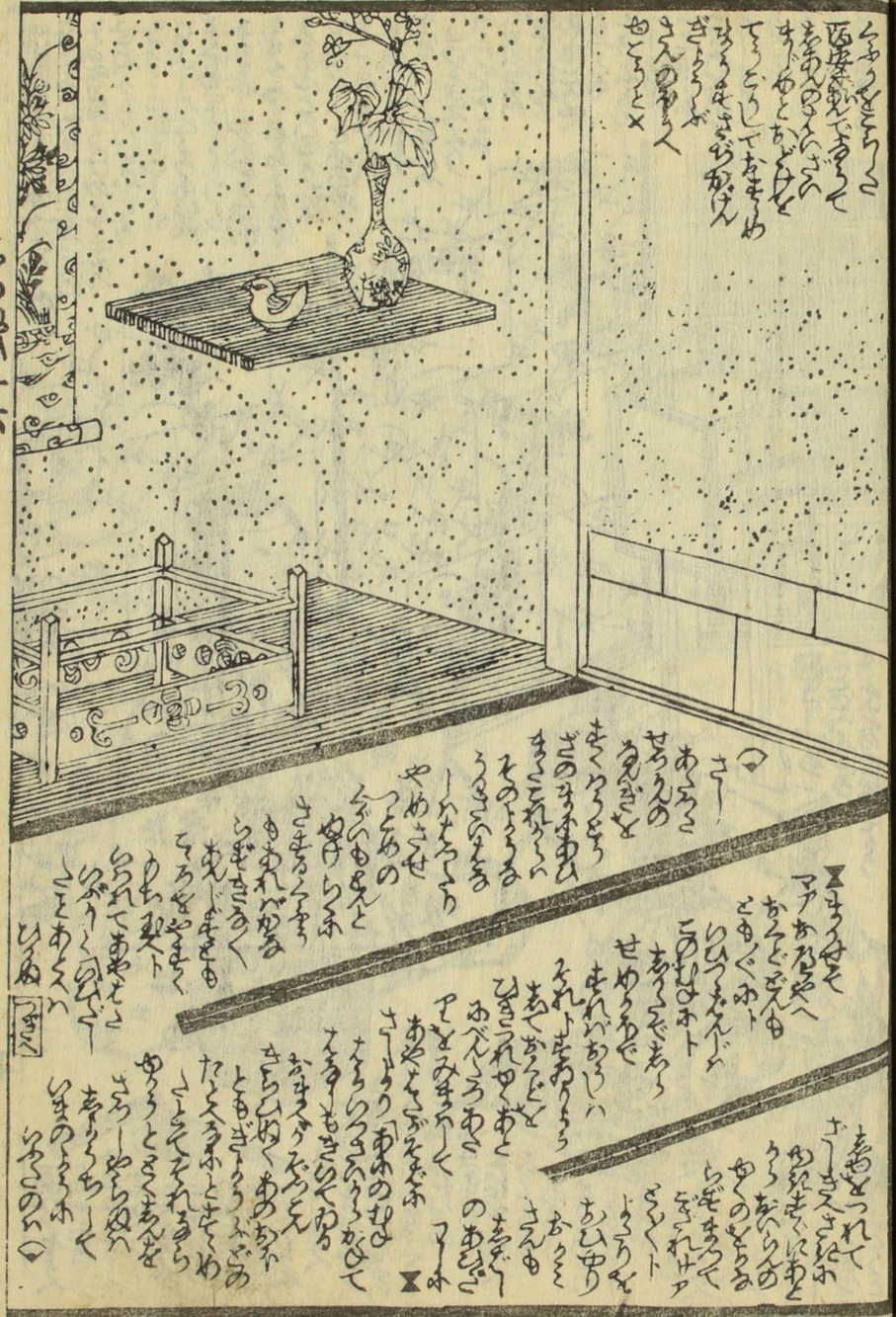
豊国画

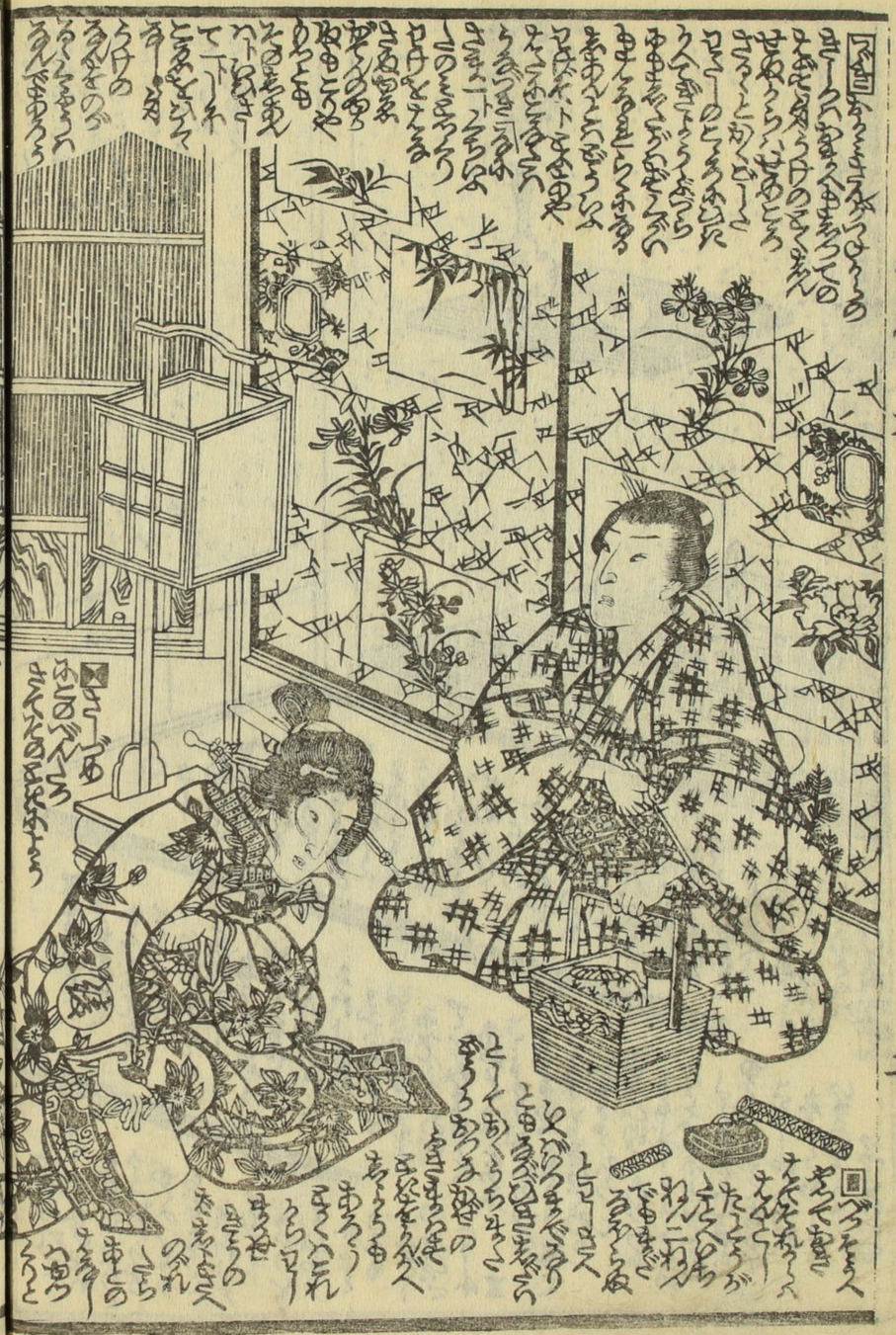
四神之内前朱雀に擬
菊地家四大勇士の一個
鳥山秋作輝忠

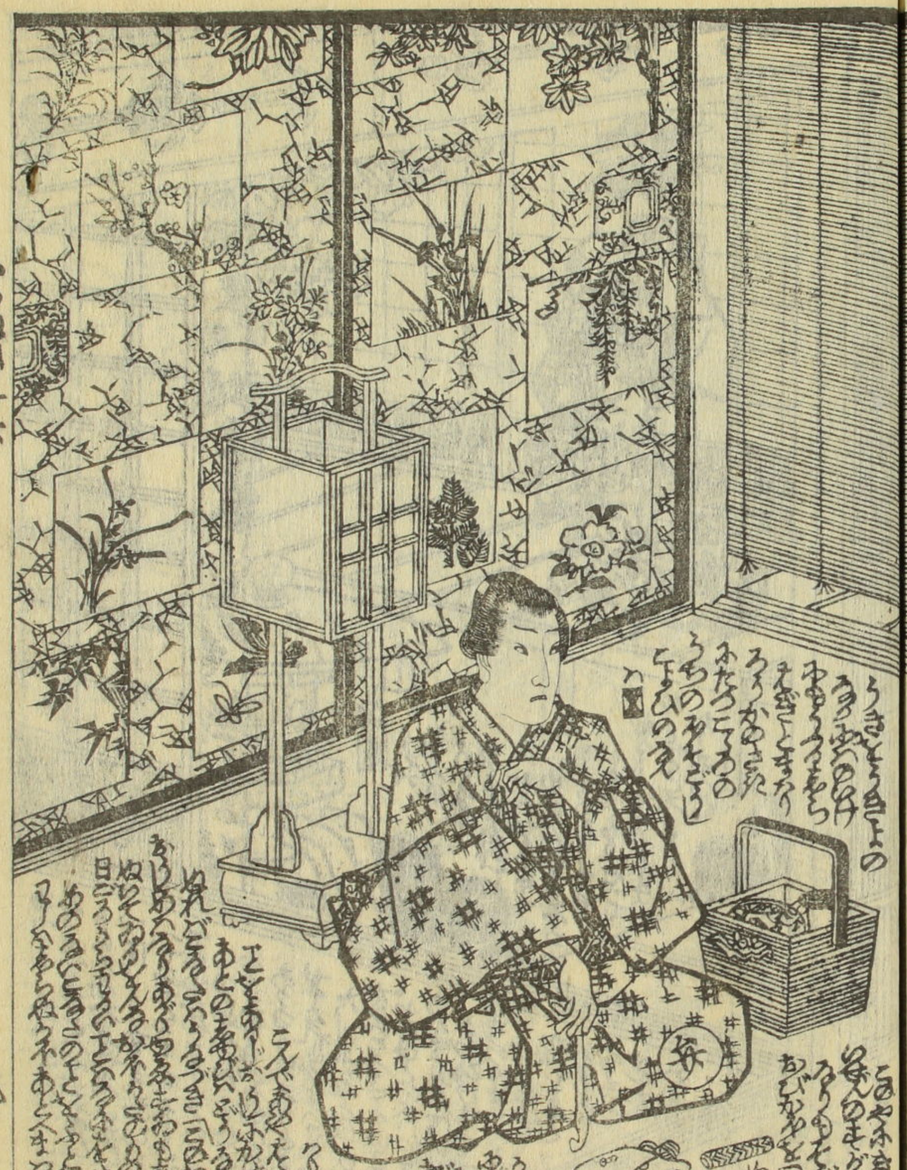
曲亞周白

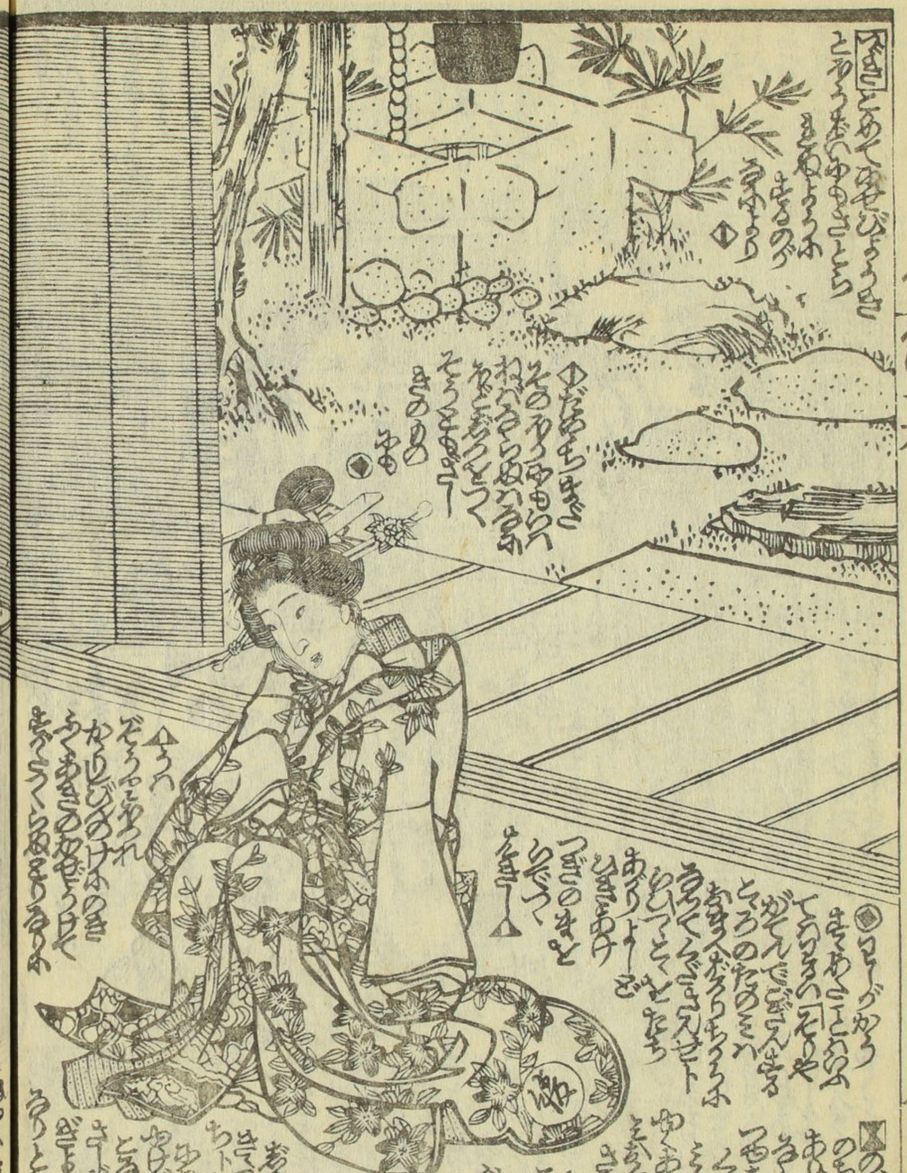
四神之内左青龍に擬
菊地家四大勇士の一個
龍川小文治秀勝

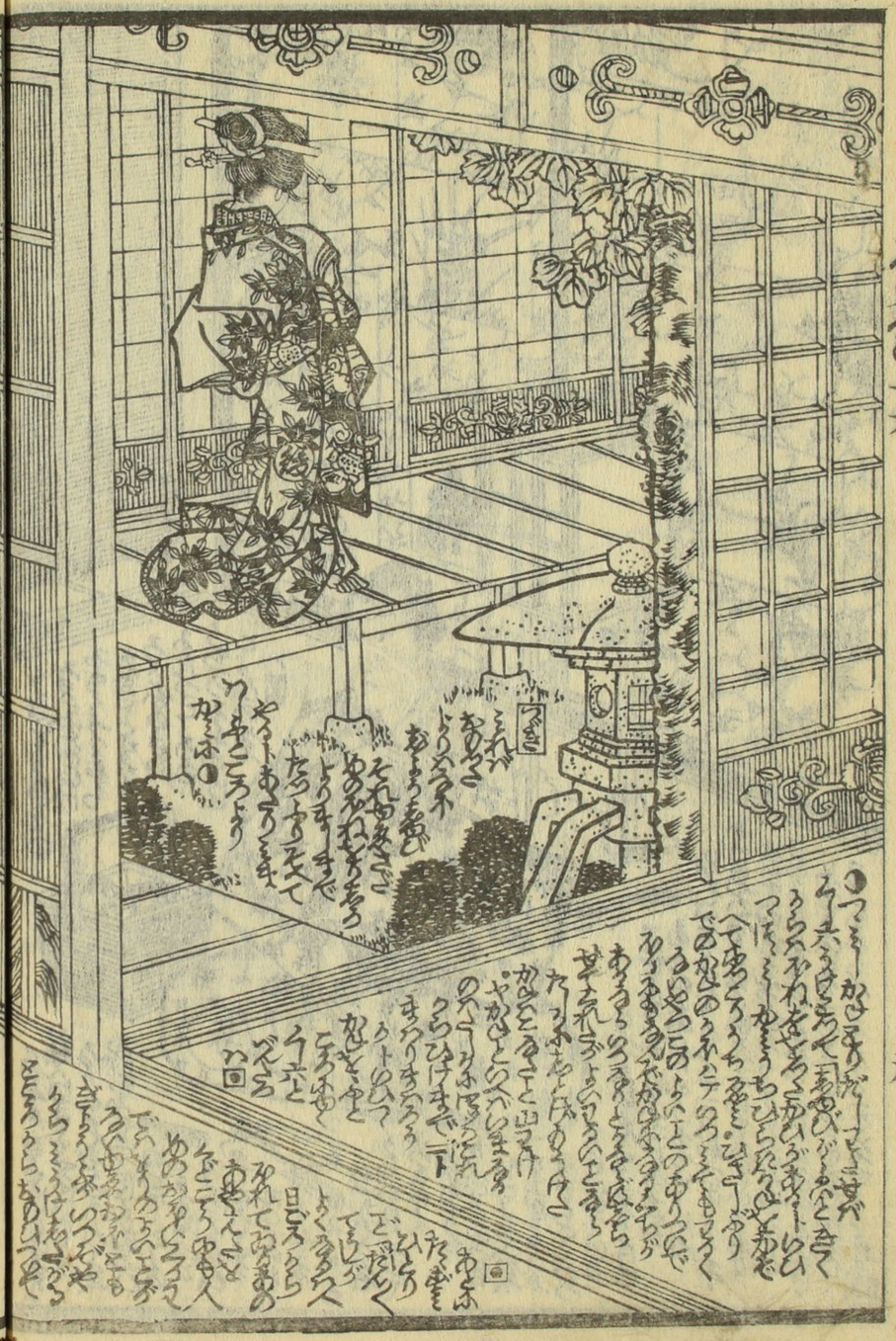
里
亀
天
ゆや











種員作

國貞画

嘉永第七稔甲寅歳新著標目録

不知火物語

第十五編より廿編迄當寅歳正月無相違出板

柳下亭種員作
楳蝶樓國貞画

此等戯雑の事は見物様方の[illegible]
仕合右ほれ[illegible]當年より[illegible]
いきつ[illegible]十六編より[illegible]
廿編と迷滞なく出板[illegible]廿一編より以後も[illegible]
[illegible]

板元 鐵白

禁方 玉壺生肌膏 一貝 三十六孔

○[illegible]
○[illegible]

金瘡 速愈 奇功氏 一枚 廿四孔

○[illegible]

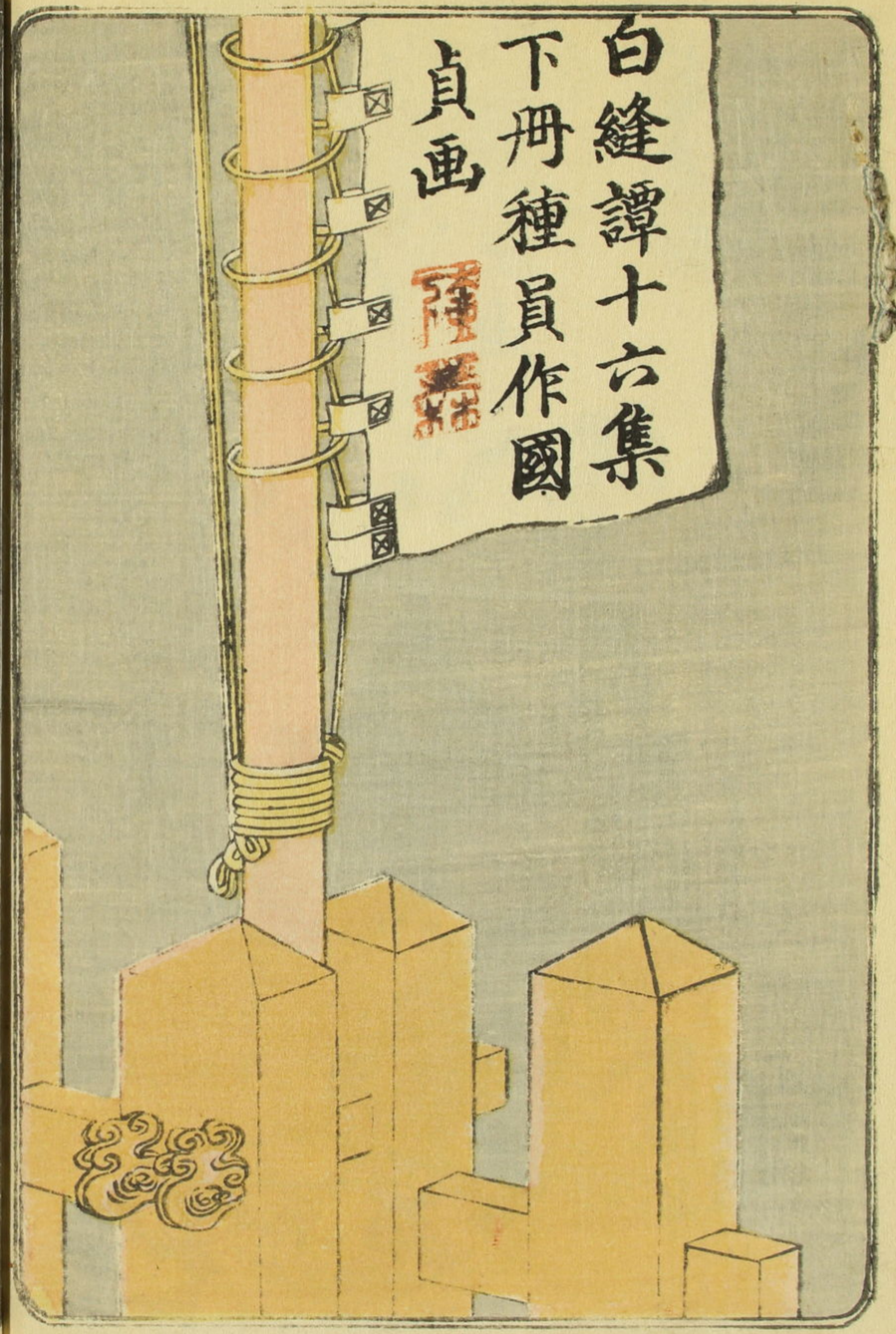
[illegible]

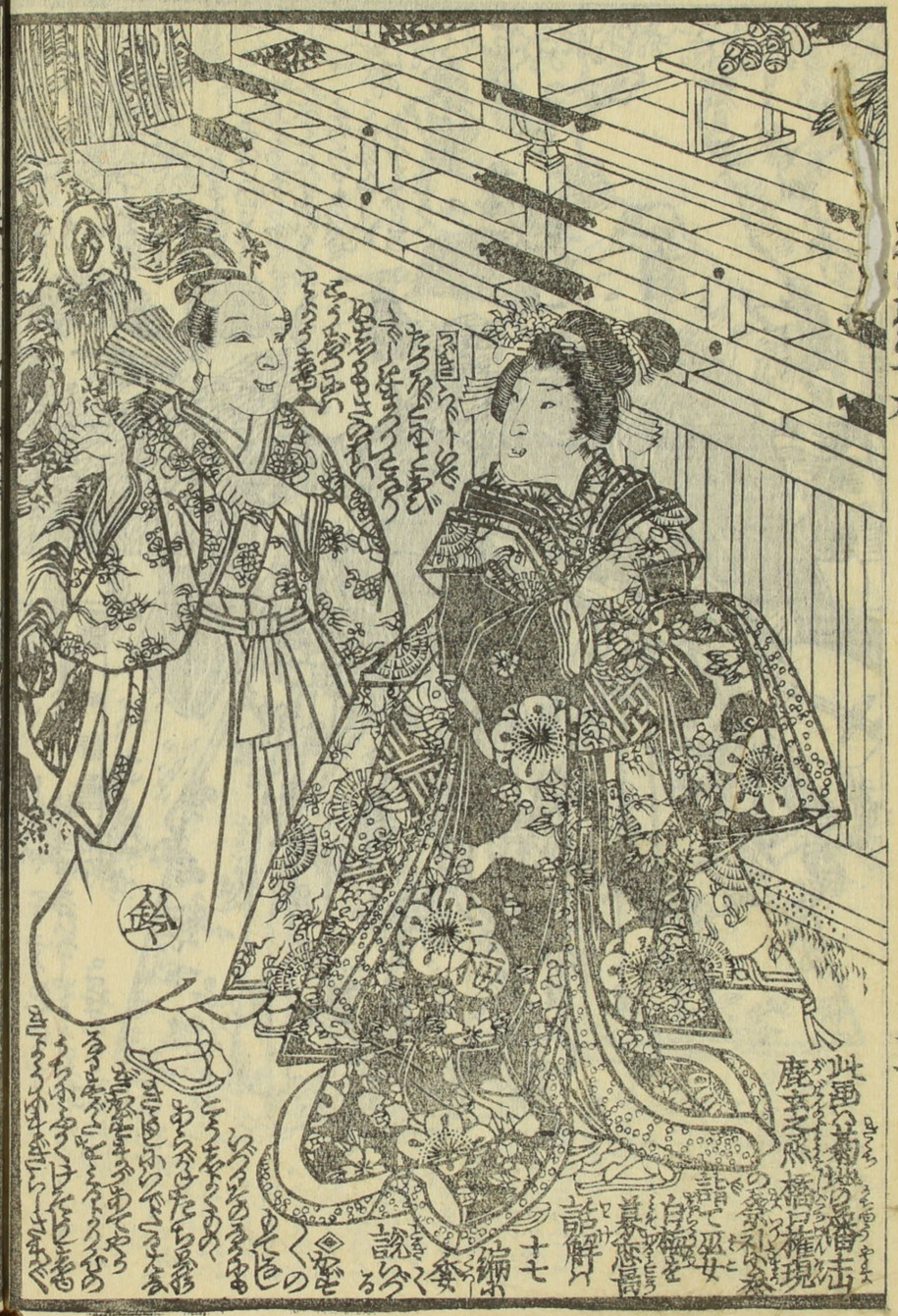
製藥所 新吉原 玉柳下 樓亭
取次所 真乳山東石坂下 大傳馬町二丁目 三河屋喜兵衛
同

地本東錦繪類問屋
通油街 藤岡屋慶治郎
真土山東石坂下 柳下亭 合梓

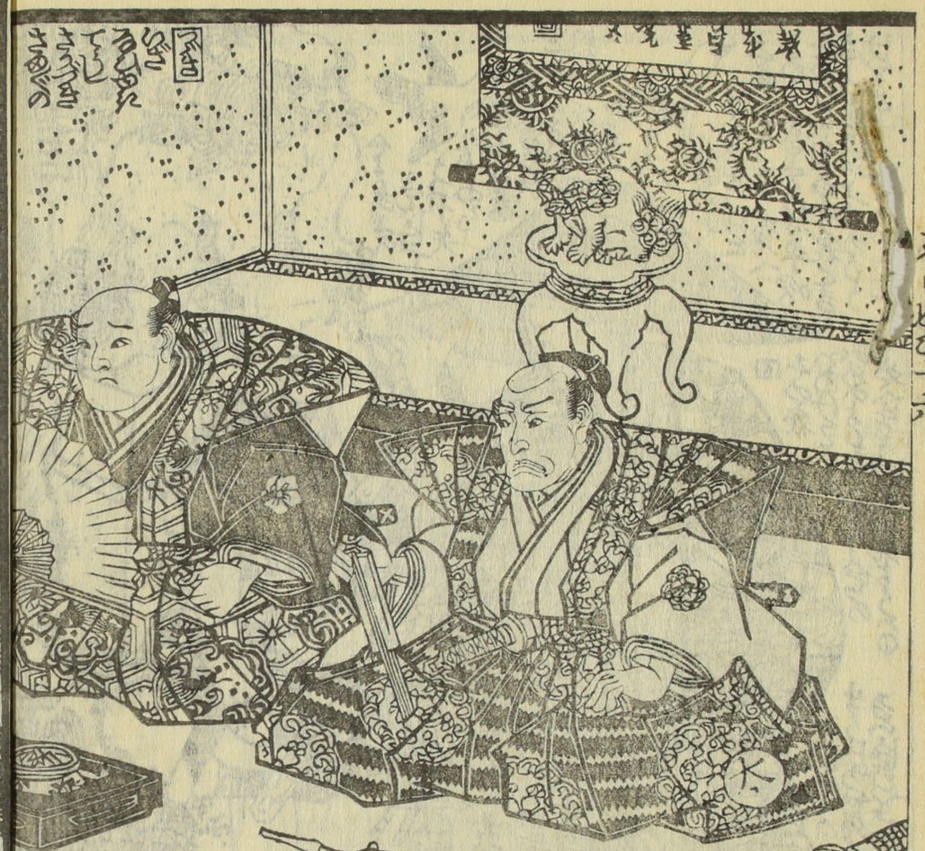
種員作
國貞画
十六編下

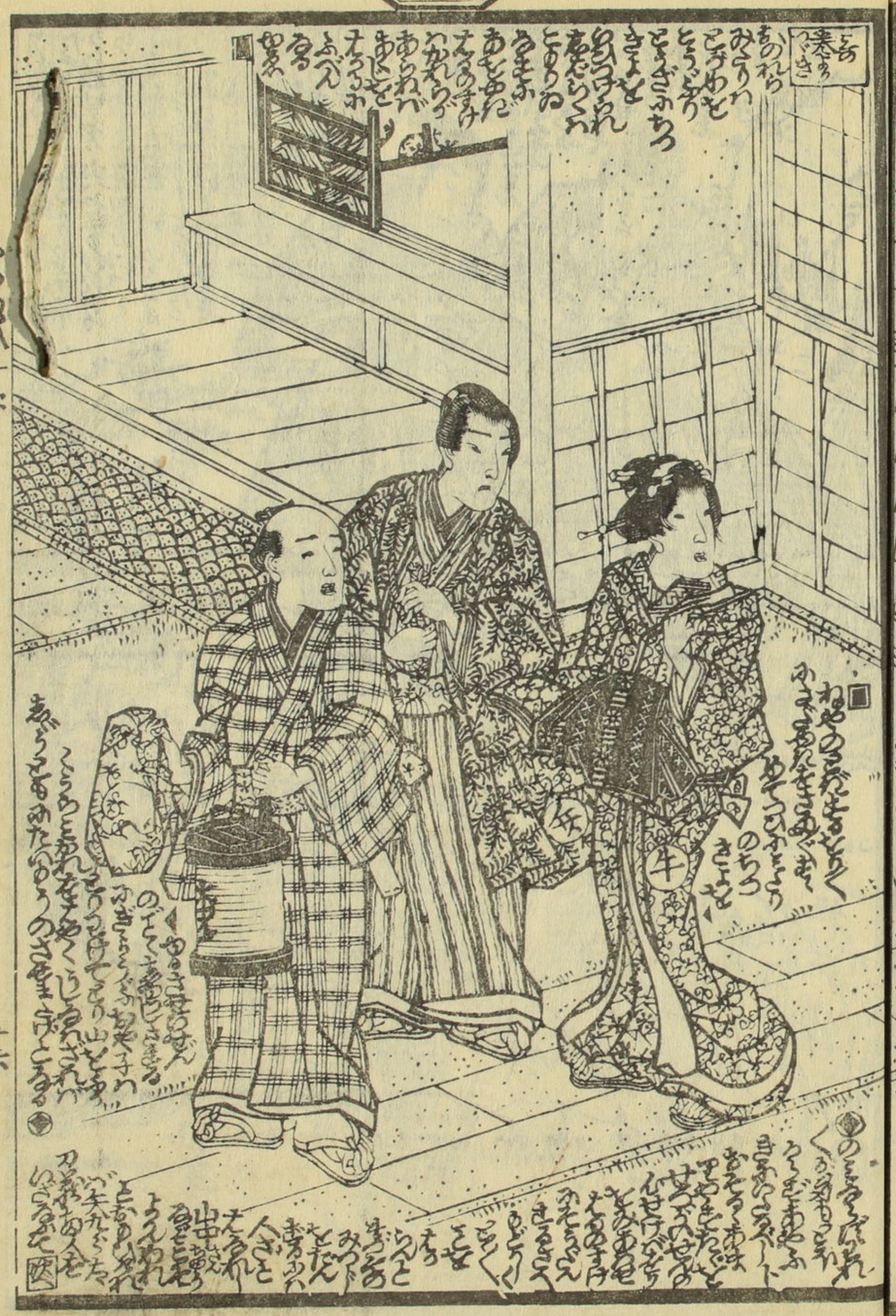
白縫譚十六集
下冊種員作國
貞重

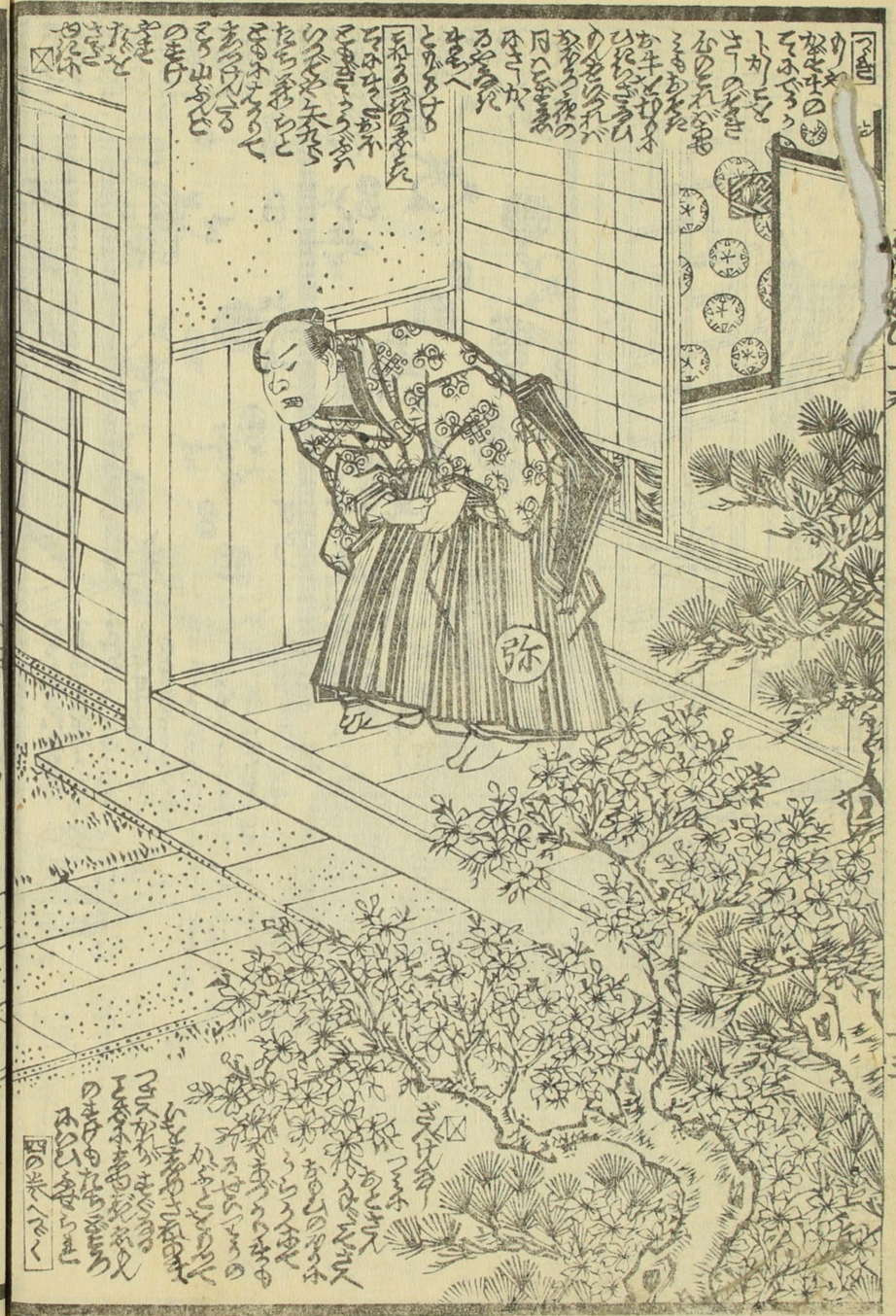




此巻の前後の物語
鹿まき忠 楠兵衛現
十七
編の
詞解

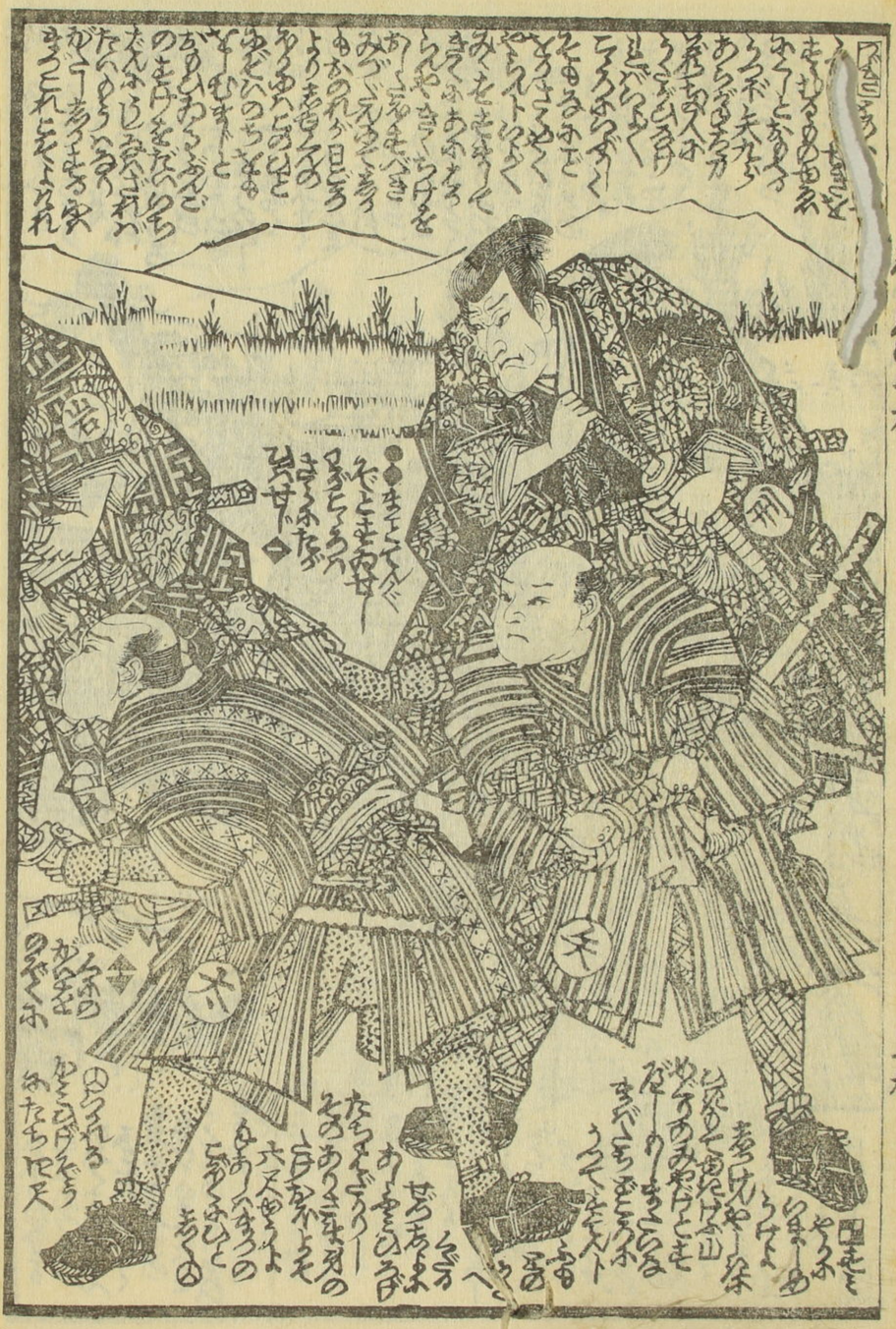



弥
牛


弥

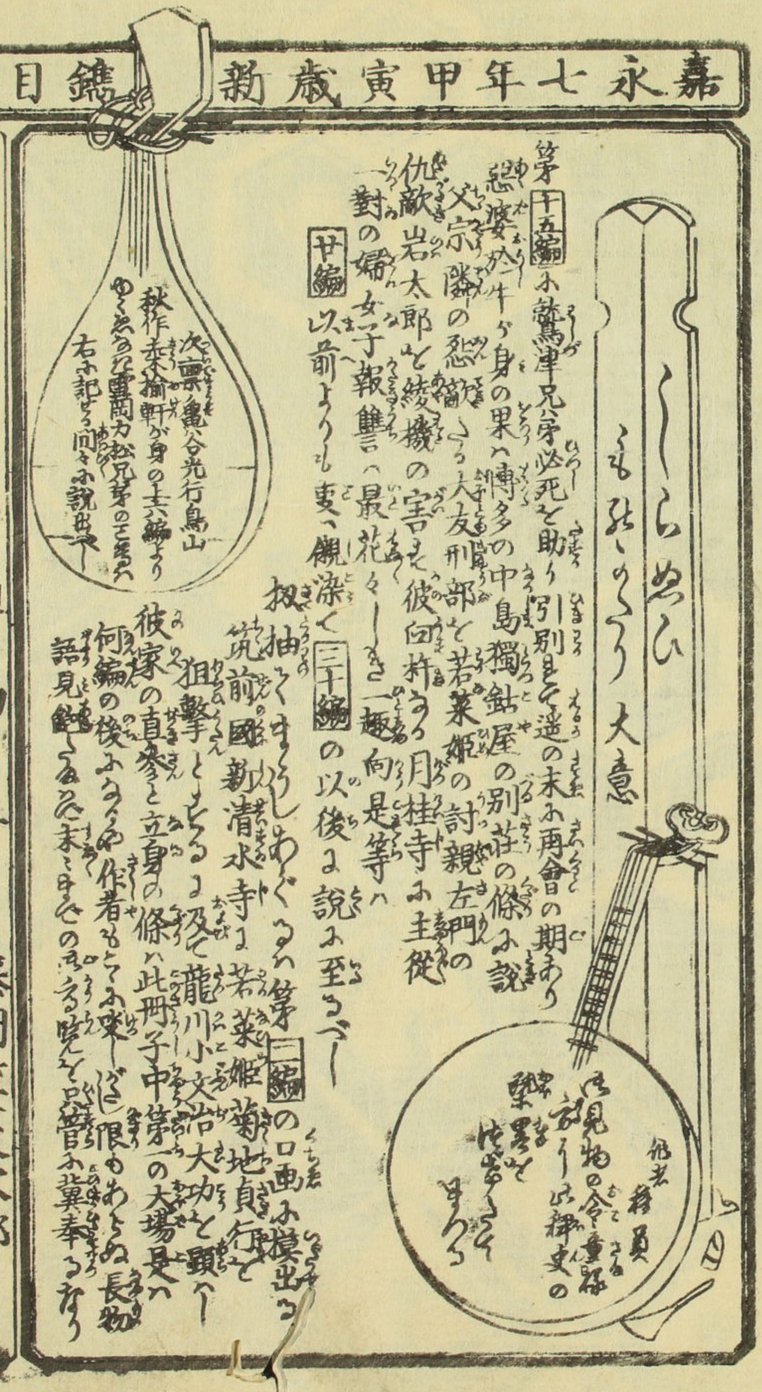
刑
山号
大

矢
代



種員作 國貞画

嘉永七年甲寅歳新鐫目録



くしらぬひ

くも孔のたり 大意

第十五編に鷲津兄弟必死を助り引別して遥の末に再會の期あり
惡婆於牛が身の果ハ博多の中島獨鈷屋の別荘の條に説
父宗隣の怨敵たる大友刑部を若菜姫の討親左門の
仇敵岩太郎を綾機の害を彼臼杵なる月桂寺に主從
一對の婦女子報讐ハ最花々しき一趣向是等ハ
廿編以前よりも更に觀染て三十編の以後に説に至るべし
扨抽くまうしあぐるハ第二編の口画に模出る
筑前國新清水寺に若菜姫菊地貞行を
狙撃ともしるに及て龍川小文治大功を顕ハし
彼家の直參と立身の條ハ此冊子中第一の大場是ハ
何編の後にかゝる作者もとに來しげに限もあらぬ長物
語見鈍しるなれ末々までの言ふ筆を只管に冀奉るなり

地本東錦画類問屋
通油町
真土山東石坂下
藤岡屋慶次郎
柳下亭合梓